

駒澤大学名誉教授

# 佐々木宏幹

## 「不思議なこと」について

# 仏教企画通信

発行日 | 平成31年3月1日

# 55号

発行所 | 有限会社 仏教企画  
〒252-0113  
神奈川県相模原市緑区谷ヶ原2-9-5-5  
Tel.042-703-8641  
Fax.042-783-0989

発行人 | 有限会社 仏教企画代表 藤木隆宜  
Email | fujiki@water.ocn.ne.jp

### 「昔」の思い出

「一〇年一昔」という譬がある。一〇年という年月は一つの昔であるという意味をもつ。辞典をみると、「昔」は「以前の時。①長い年月を隔てる過去。いにしえ。②現在とは情況がまるで違う過去の時。過去の一〇年を一期としていう語」などとある。

「大昔」という語は、①と②の意味を強調した語であると言えよう。

私が幼なかつた頃、大人たちが「昔はよかつた」とか「昔はこんなではなかつた」などと語り合っているのをよく耳にした。

この種の表現は今日でもよく耳や目にするが、とくに非社会的、非人道的な出来事・事件が生じた際に用いられるようである。「昔はこんなことは滅多に起こらなかつた」などその例である。

「昔」の意味内容が人によって様々であるのは、人によって体験・経験する(した)中味が少なからず異なるはずだからである。

私はいわゆる「十五年戦争」(満州事変(一九三二)から太平洋戦争敗戦(一九四五)の体験者であるが、敗戦後七〇年以上過ぎた現在では、私の少年時代の体験など、「大昔」の出来事になるであろう。

私と同年代の人たちも年々減少してゆき、「昔」を語り合える人も少なくなつた。ごくたまにであるが、同年代の人と話すことがある。

ところが私が語りたことと相手話したくないとの間にかなりの落差があり、見解が噛み合わないことがよくある。「昔」のことといつても「昔」の中味がお互いに異なるからである。

私にとって強く記憶に残っている「昔」が悲しい出来事だらけであつたのにたいして、相手はそうでない場合には、相互の「昔」は「人生の差異」そのものであろうからだ。

私にとつて決して忘れえぬ「昔」は、「死」である。物心ついた頃に体験したのは線香の匂いであつた。「昔」の語はいつも「死」の語と重なっている。

それもそのはず、私は二歳で父を、三歳で母を亡くし、小学校四年生のときには祖父もいなくなつた。私の幼少時代「昔」は、「葬い」の連続であつた。

### 不思議体験の思い出

私が気味の悪い、言い換えればおどろおどろしい話を耳にし目にしたのは、四〜五歳頃であつたらうか。それは両親を含む身近な人たちの「死」の反映であつたのかも知れない。

お姉さん(当時は「女中さん」と呼んでいた)が夜、添い寝のときに語ってくれたのが、「幽霊」と「お化け」の話であつた。

より長く生きていたいのに肺結核(肺病)で若くして死去した女の人は、この世恋しさの幽霊となつて出てくるというものであつた。気味の悪い話を私の耳に吹き込んだ姉さんは、そのうちにすやすやと眠りに入ってしまったが、こちらは頭が冴えて眠れない。仰向けになつて天井を見ているときだつた。何だか足が重い。誰かが足を踏みつけている。頭を擡げて一寸見たいが怖くてできない。しかし見たい。

思い切つて頭を擡げた。何と、足下には茶色い着物を着た、青白い顔の中年男が立っていた! 「出たあ」と大声を出したかつたが、出なかつた。このことがあつてから、独りで手洗いに行けなくなつてしまつた。それ以来しばらくの間、手洗いにいくのが怖くて、縁側から音を立てないよううに用を足した。あれは幼児性神経症とでも言うべき症状であつたのだからか。そしてこの症状はかなり長く続いた。

私が育つたお寺には、御本尊を安置する須弥壇の裏手に位牌堂があり、そこには数多くの檀家の位牌と共に、埋葬前の遺骨箱も安置されていた。毎朝そこにお仏器を供えるの

が私の役目であつた。

ある朝、お仏器を供えた後、ふと結核で亡くなつた若い女性の遺骨箱が目が行つた途端、「うーん」と唸るような女性の声がかたしかに聞こえたのである。驚いたの何の! そのときの驚きは八〇年経つた現在でも、わが胸底を離れない。私は腰を抜かして逃げたくないので、這い蹲うような恰好でその場を離れた。以後、その骨箱は意図的に見ないようにした。のちに高校、大学に入り、大人になつても、あの「不思議な感覚」が失せることはなかつた。

理窟の上では、そうした体験は幼少時の恐怖心(感覚の一つ)ということになる。まして「空・無我」を説く仏教者においておや、である。にもかかわらず、私の体験がなかつたと言え、それは嘘になる。長じて私は宗教(文化)人類学を専攻し、客観的・合理的に人間の生死文化を調査・研究する学人として生きてきた。

生きてきた。しかし、既述の体験を含め「不思議なこと」には数々遭遇してきた。他の研究者(知識人)たちは、「不思議なこと」を経験したことが全くなないのであるか。いやたといつても、口にした問題にしたりすると、知識人の沽券(体面や品格の意)にかかわると、そこはかとなか感じているからではあるまいか。

なぜなら「不思議」とは「不可思議」の略であり、「思いはかることもできず、言語でも表現できない、怪しい異様なこと」を意味するからである。

調査した訳ではないが「思いはかることも、言語表現もできない怪しいこと」などこの世にあるものか、あるとすればそれは迷信だと考え、且つ主張するのが知識人(インテリ)であると捉える傾向がこの国では決して少なくないと思われる。

はたしてそうであらうか。



### 「不思議なこと」あれこれ

「西郷どん」であり、西郷隆盛が主役を演じていた。隆盛はよく知られているように、大久保利通、木戸孝允と共に明治維新の三傑と称される超有名人である。時間があればできるだけ観るようにしていたが、鈴木亮平演じる隆盛、瑛太の利通は毎回好演していたように感じている。玄人筋はどう評価しているのだろうか。

ところで、昔からよく知られている伝説に「義経伝説」というのがある。史実では源義経は、兄頼朝と不和となり、諸国を流浪の後、陸奥(現在の東北地方)の藤原秀衡に庇護されるが、その子泰衡に急襲され、衣川の館(現在の岩手県平泉町にあったとされる奥州藤原氏の居館)で自害したとされる。

ところが伝説では義経は生きのびて蝦夷(現在の北海道)から大陸に渡り、そこでも武將として活躍するにいたったというものである。いわゆる「判官びいき」である。

西郷隆盛の場合は内戦である西南戦争(一八七七(明治一〇)年)に敗れて鹿児島(城山)で自刃した。行年五十一歳。彼の死後間もなくして、「不思議な」噂が流れだした。夜空に大きな赤い星が出現したが、人々はその星に陸軍大将の服を着た西郷を観たといいだし、その星を「西郷星」と呼んだ。

さらに一八九四(明治二七)年には次のような噂も巷間に広がった。

城山陥落の前夜、西郷以下(下の諸將は重圍)敵が幾重にも取り囲んでいる状態を脱して串木野の島(浦)から和船で甌島に渡り、そこからロシアの軍艦に乗りこみ、ウラジオストク港に上陸した。そしてシベリアの一兵営に身を隠し、ロシア兵の訓練をしていた。

ところが一八八四、八五(明治一七、一八)年の頃、黒田清隆が欧州巡回の際に、このことを耳にして、ひそかに兵営を訪ねて面会し、大いに日本の将来を語り合い、やがて帰朝することを約束した。そこで西郷はこのことをロシア政府に申し出たところ、同国政府は諸將の去ることは惜しいが、諸將が故国を思う気持ちを察し、軍艦で護送しようということになり、数艘の軍艦で帰国することになったというのである。

西郷が城山で死したのは一八七七(明治一〇)年であるから、右のような噂が広がったのは死後一七年を経たことである。

このことは一人物の生死が伝説化するのにはおよそ二〇年、つまり「二昔」を必要とするということかもしれない。毎週日曜日夜に「西郷どん」を楽しんでいた私たちは、約一四〇年前の日本に遊んでいたということになるだろうか(西郷の伝承については、小松和彦著「神になった人びと」光文社、二〇〇六参照)。

それにしても、西郷がロシアの軍艦に乗りこんでロシアに行ったという話は、まさに荒唐無稽なことなのだが、人びとがこの話を「デタラメ」として一蹴しえないのは、ひとえにその人物の「不思議な大きさ」にあると言えよう。

多くの人がひとは、私がかつて寺の納骨堂で感じたような感覚を西郷にも抱いているのであろうか。

もう一つ、不思議な話を取りあげよう。太平洋戦争(一九四一―一九四五)中の出来事である。

開戦劈頭(最初期)、日本軍は北太平洋洋アリューシャン列島のアツツ島とキスカ島を占領した。一九四二年六月のことである。

しかし翌四三年五月、アツツ島守備隊は米軍の猛攻に遭い、全員玉砕した。

一方キスカ島では、救出艦隊が何度も救出を試み、ついに四三年七月に海軍守備隊五六三九名全員を救出した。

救出された隊員を乗せた艦隊が濃霧をぬってアツツ島沖を通過しつつあったとき、全員玉砕したはずの島から「バンザイ!バンザイ!」という声が聞こえてきたという。救出作戦成功を祝うバンザイであった。この声を耳にした者は多数おり、二名の乗員は実名を記して真実であったことを証言したという。

この話について、かつて自分も海軍の情報士官として戦線に在ったことのある作家の阿川弘之氏は、それは「異常な心理状態にあった人びとの証言」として扱っている。

「幻聴であつたらう」と片づけられたが、このことを知った作家の司馬遼太郎氏は「そんなことはないよ」と阿川説を否定し、「歴史にはそんなことがいくらでもある」と話し、「おそらくその話は真実だろう。真実だと信じてあげることが、この場合いちばんいい。何でもかんでも、むげにデタラメと決めつけることは良くないことだ」と生真面目な口調で言ったという。

司馬氏にはアツツ島の霧中の声に何か思いあたることであつたのだろうか。

「読みだしたらやめられない」面白さに富んでいる。司馬氏はたいへん博学であり、古今東西の史実に精通し、庶民の生活の諸相にも実に詳しい。「歴史には不思議なことがいくらでもある」という人間・社会観を有していたからこそ、司馬文学に囚われてしまう人が少なくないのだから、繰り返すことになるが、「不思議」とは「思ひはかることもできず、言語でも表現できない、怪しい異様なこと」を意味する。

私が幼少時に、納骨堂の若い女性の遺骨の前で耳にした「うーん」という唸り声は、九十歳近い今になっても、私の脳内で不気味な音を立てている。この不思議な想いは多分あの世に仏界まで届いていく外あるまい。

現代社会にも不思議な出来事はあまた生じ、跡を絶つことはない。それなのに現代人はこの種の話や事象を揶揄し、軽視しがちである。

その裏には多分、合理的、科学的に肯えられない(肯定できない)ことは認められないという牢固たる観念があるからだろう。こういう観念の持ち主は、いとも簡単に「迷信」という語を使いがちである。合理的・科学的に説明できないものは「迷信だ」と一刀両断しがちである。この傾向が極端化すると、人間はロボット化するのではないか。この場合ロボットとは科学技術の成果としての動体を言う。具体的には「心」、「霊」、「魂」などを欠く存在である。科学者のなかには、近い将来ロボットが人間に代わって仕事をするようになる」と高言する人もいいる。

もしそうなったとき、葬儀(祭)や供養などの仏教儀礼はなくなるのだろうか。

毎年八月一日に営まれる国家行事に天皇が臨席して「全国戦没者の霊」と記された霊標の前で、お言葉述べられる行事も廃止されるのであるか?



## 「憲法改正」と日本人の心のあり方を考える

井藤士純 文芸春秋社編集  
塩谷崇之 上智大学教授  
島園進 哲学者  
内山節 司会 藤木隆宣

### 憲法改正と立憲の意義

藤木 昨年の自民党総裁選で安倍首相がまた統投することになり、ずつと悲願だった憲法改正というのが、いよいよ表舞台に出てくるのではないかと言われています。安倍首相が言っている憲法改正というのは、今回に始まったことではなくて、ずいぶん前から自民党自身がその憲法改正というものをずつと党の方針としてきたわけですね。

塩谷 平成二十四年に自民党としての憲法改正草案をまとめました。自民党の憲法改正草案、これが基本的に自民党が目指したい憲法の改正であり、そして、自民党が目指している国の形、政治の在り方を記したものです。ただし、今、自公連立政権ということもあり、また、国民の中でも憲法改正に対して抵抗感を持つ人たちが多いということ、で、全面的な改正案は一旦少し置いて、取りあえず憲法九条の改正を軸とした改正を、恐らくここ数年で出してくるのではないかとということになっています。

現在、憲法改正の案として挙がっているものは、概ね四つの論点というふうには言われています。一つは自衛隊、平和主義の問題。二番目が参議院の存在意義、合区の解消の問題。一票の格差にも関連するところ。三つ目が教育の無償化の問題。もう一つが緊急事態条項、この四つが憲法改正の論点として挙がっています。

この四つのうち、安倍政権では恐らく自衛隊のところをまず通して、次に残りの三つを通し、そして最終的には、平成二十四年の改正草案で示したようなものを実現させていこうと、そういう計画に思われるわけです。今日は宗教界とかかわりで、どのあたりが問題になってくるのかを中心に話してできればと考えています。

まずは自衛隊、平和主義の問題。これに対して国民および宗教界がどういうスタンスでいるのかということ。それから、緊急事態条項ですね。緊急事態が起きたときに内閣が政令で人権を制限できたりするということ、そういう条項を設けるとときに、これが宗教界にとってどういう影響

を与えるのかということでしょうか。それから教育の無償化に関しては、無償化自体よりも、私立学校の助成ですとか、学校における宗教教育の問題等が若干絡んでくると思います。そして今後論点になってくるものとして、信教の自由と政教分離の問題。恐らく今回の改正では出てこないと思えますけれども、今後問題になってくると思われまます。そこについても先生方のご意見なども伺いできればと考えております。

島園 戦前の憲法、大日本帝国憲法というのは、国体というものを基本的な理念にしています。天皇中心に国民が和をもって上下の秩序を尊び、一体となる、実際はそういう方向へ憲法を変えていきたという意志があると思われています。これは、戦後の憲法はずつと押し付け憲法であって、西洋風の個人主義はわが国の伝統にはそぐわない、という考えがあり、例えば個人という言葉はなくしてしまおうというように、そういうところが自民党

とつながっているところ、信教の自由と政教分離の問題。恐らく今回の改正では出てこないと思えますけれども、今後問題になってくると思われまます。そこについても先生方のご意見なども伺いできればと考えております。

### 憲法改正に対しても「ちょっと変えるの待って、立ち止まろうよ」と。

塩谷 内山先生、その点についてはいかですか?

内山 バブルの時代ぐらいいいと云っていいのかもしれないですが、様々なものが変化していくことが希望だった時代がありました。その時代に日本は憲法改正ができたかというとき、そのときには戦後精神みたいなものが人々の中には定着していて、憲法だけは変えてはいけないという感じがあつたと思います。

今では変化に希望よりも、むしろ不安を持っている人たちがたくさんいる時代に移ってきて、変えることがプラスなのかという疑問もあるようです。一遍立ち止まっておこう、と。それは、自分たちの生き方として、変えることが果たして前のめりになれることなのか、という気持ちを抱いた「緩やかな護憲派」と言いますか、そういう考え方を抱く層も出てきている時代かなと思っています。ですからこの改正はそう簡単にはいきませんよ、と考えています。

私は結構いろいろな地域に行つていつも思うのですが、例えば島根県の隠岐島、あそこには海士町という、若い人が

あるいは特定政党の理念を押し通すところやっているの、で、世論調査では国民の間には憲法改正をすべきだという賛成意見が少ないですね。そのことをしつかりと踏まえて、もっと冷静に考えてほしいと思います。

ではその人たちの心情は何かと言うと、昔からの島の暮らしを守りたいだけなんです。だから、すごい保守主義です。あそこは漁業が中心で、若干農業もある島なのですが、それをこれからも続けていきたい願っています。ただ、今の時代だから、ほんやりしているとその島の生活も潰されてしましますので、そこに若者たちをたくさん呼んで好きにやってくれ、というわけですね。

ですから、全く改革運動ではありません。むしろ本当の意味での島の伝統保守、その精神が新しい人たちにどんどん自由によらせているのです。基底にあるのは、戦後イデオロギーに基づく革新派ではなくて、本当の意味での地域保守、文化保守の考えです。そういう人たちが、むしろ今の保守系政治に対する抵抗勢力になりつつある時代になってきました。憲法改正に対して「ちょっと変えるの待って、立ち止まろうよ」と。今の野党等もその辺を見誤っているのだからという気がします。

藤木 なるほどね。

島蘭 「昔からの生活」ではありますが、大きなネットワークの全体に巻き込まれざるを得ないことはよく分かっているので、昔風のものを守るということ



島蘭 崇之

は、実は全体を変えることだ。これまでで尊ばれてきた、地域にあった生態系、生物の生態系と同時に社会的生態系のようなものを、むしろ社会に及ぼして

内山 憲法改正について、日本だけではなく海外に目を転じてみると、例えばヨーロッパの国々では、何遍も憲法改正を繰り返しているわけですからドイツなどは、しょっちゅう改正していると言ってもいい

ますので、法律をつくったその法律が憲法上は違憲にな

と、そのところでは政治的にではなく、実質的に判断をする場所が

欧米で憲法改正を、絶えず何遍もやっているというのは、何に對してなされていく契約であるのか、ある程度厳格に守られていると言えます

政府も憲法を守ろうという意識が薄いから、欧米的な憲法改正の議論と日本の憲法改正の議論

守ろうという意識が薄いので、欧米的な憲法改正の議論と日本の憲法改正の議論

日本における憲法というものが、悪い意味でもいい意味も含めて、

近代的立憲主義が起る前は、社会秩序の根本原理が、宗教に求められる要素が

政府も憲法を守ろうという意識が薄いから、欧米的な憲法改正の議論と日本の憲法改正の議論

は、一方で国体論に基づく国家という明治維新の祭政一致

戦前に、要はお上に任せておいたら、大変な方向に行ってしまうから、

戦前に、要はお上に任せておいたら、大変な方向に行ってしまうから、

戦前に、要はお上に任せておいたら、大変な方向に行ってしまうから、

る、そういう意識だったと思

仕組をつくるというところから、

仕組をつくるというところから、

仕組をつくるというところから、

向に行ってしまったから、

仕組をつくるというところから、

仕組をつくるというところから、

仕組をつくるというところから、

いるような傾向があると思う

ただ他方で、人権を守るために憲法が必要なんだという

内山 すべてのことというのは歴史の経緯の中で、歴史の中の一つの文化的な作用のよ

ね。ですから、人権でも戦前の社会のあり様

打ち出されてくるという。だから、書かれてある文言が正しい

さうですが、条文をそのまま読めば、これはもう自衛隊は違憲

藤木 今、現代人のアイデンティティが崩れています。その中で、

内山 以前は社会があまり変動しない時代と言いますか、

会がつくり出した人権ということ自体について言えば、

藤木 今、現代人のアイデンティティが崩れています。その中で、

藤木 今、現代人のアイデンティティが崩れています。その中で、

内山 以前は社会があまり変動しない時代と言いますか、

年齢を重ねている人たちに価値があったのです。例えば、

結局、戦後の日本の社会が目まぐるしくいろんなものを

藤木 今、現代人のアイデンティティが崩れています。その中で、

内山 以前は社会があまり変動しない時代と言いますか、

事にしなかつた。すべて変えていくみたいな。そういう

藤木 今、現代人のアイデンティティが崩れています。その中で、

藤木 今、現代人のアイデンティティが崩れています。その中で、

内山 以前は社会があまり変動しない時代と言いますか、

かね。世界的にそうなんです

藤木 今、現代人のアイデンティティが崩れています。その中で、

藤木 今、現代人のアイデンティティが崩れています。その中で、

内山 以前は社会があまり変動しない時代と言いますか、



編集後記

お経の翻訳装置の開発・設置を

(神奈川県八一九歳)

先日、寒い中、義兄の一周忌のため、横浜市内の寺へ出向いた。本堂での和尚様による「お経」が始まると、さらびやかな法衣、力強く独特の発声と節回しが本堂に響き、荘厳な雰囲気

から、二、三さえあれば、日本の優秀な技術で製作できると思う。(朝日新聞一月二七日朝刊より)
▼この「朝日新聞声の欄」からくみ取りたいことは八、九歳の方がわかりやすい言葉で法話をしてほしいと訴えておられます。私の場合は葬儀、ご法事では必ず弊社発行の「般若心経」、「修証義」の入った「曹洞宗檀信徒



員にお配りして一緒に読経をしています。また読経の前には曹洞宗であること、一仏両祖のこと、お経を読むことは年回の仏様と共に仏道を歩ませて頂いていることだと説明して一緒に読経します。後で参列者からは一緒に読経することは初めてだったとのこと。感想に加えてとてもよかったです。多くの方は故人の年回法要はいいことだと考えておられますからその一期一会をより有益に感じて頂けるようにすることだと思います。

わが心の師・梅原猛さんを悼む

(愛知県七五歳)

わが心の師、哲学者の梅原猛さんが亡くなった。法隆寺の数ある謎に挑んだ「隠された十字架」や、柿本人麻呂は石見国(島根県)で流刑死したと説いた「水底の歌」では、まるで推理小説を読むような楽しさを味わった。八八歳で出版された「人類哲学

序説」では現代文明を批判され、日本古来の思想である「草木国土悉皆成仏」をこれからの文明の思想にしなければ人類の存続は危ういと述べられた。自然界のあらゆるものには仏性があ

序説

▼昨今お寺離れが進んでいると言われていますが、仏教には梅原猛さんが言われるように宝物の教えが沢山あります。この教えをもっと広めましょう。一カ寺ではできないですが、宗務所単位で「禅を聞く会」をもっと展開したらどうでしょう。そんなに難しい話ではないと思います。

平成二十一年から活動を始めた児童養護施設「手まり学園」は十周年を迎えました。この間ご寺院には多くのご支援をいただきました。紙面に厚く御礼申し上げます。

藤木隆宣

仏教企画通信

ご支援寺院名

H30.10.19~H31.1.21

Table with 3 columns: 所在地, 寺院名(個人名), 金額. Includes entries for 愛媛県 高昌寺 (20,000), 島根県 福知寺 (5,000), 福井県 妙徳寺 (3,000), and a total of 28,000.

手まり学園

寄附者御芳名

H30.10.19~H31.1.21

Table with 3 columns: 所在地, 寺院名(個人名), 金額. Lists numerous donors and amounts, including 神奈川 青木義次 (63) for 7,000, 東京都 龍昌寺 for 5,000, and a total of 583,000.

仏教企画発行の刊行物 (\*部数により割引があります) すべて税別価格です

Table listing publications and prices: 『修証義』解説 (1,400円\*), 『うたい継ごうよ、子守唄』 (1,200円\*), 『まんが問答一期一話』 (1,200円\*), 『道元禅より見たる般若心経解説』 (2,200円), 『葬送のしおり』 (30円), 修証義読本『生老病死』 (500円\*), 『曹洞宗檀信徒必読』 (300円\*), 曹洞宗檀信徒必読『供養のすべて』 (140円\*), 曹洞宗檀信徒必読『葬儀のすべて』 (150円\*)

\*『仏教企画通信』を10部以上購読希望の方は一部100円で頒布致します。同封はがきの空欄にその旨をお書きください。(消費税、送料別)

Table titled '曹洞禅グラフ' showing publication dates and pricing tiers for 1部 (200円), 9部以下 (200円), 10部以上 (150円に割引), 20部以上 (135円に割引), 50部以上 (130円に割引), 100部以上 (120円に割引), 200部以上 (110円に割引), 300部以上 (100円に割引), 500部以上 (90円に割引).

仏教企画 新刊書のご紹介

ぶつねはんず 仏涅槃図の絵解き

高橋秀榮・平川恒太共著 A5版/16ページ(4色8ページ、1色8ページ)



定価(本体150円+税) 100冊以上ご購入の方は、本体価格より1割を引かせていただきます。

お申込み 〒252-0113 神奈川県相模原市緑区谷ヶ原2-9-5-5 TEL: 042-703-8641 FAX: 042-783-0989 Email: fujiki@water.ocn.ne.jp
※ご寺院名後の番号(3桁もしくは4桁)がお客番号(コード)になります。お申込みは ①ご寺院名 ②お客番号 ③電話番号でも可能です。